

第二十五回 齋藤茂吉短歌文学賞

栗木 京子 『水仙の章』

砂子屋書房

選考委員

委員長 三枝昂之

委員 小池 光

永田和宏

馬場あき子

【贈呈式】

平成二十六年五月十一日(日)

(五十音順)

栗木 京子 『水仙の章』 (自選)

かたまりのほぐれしのちに犬と犬走り去りたり梅林の向かう

オリンピック終へて子を産む選手ありをみなの性は湖うみの上の虹

八丁みそ白みそ飛騨みそ次々に捨てて浄める母の冷蔵庫

皿汚しながらひとりの昼餉終へ誰にともなく手を合はせたり

死者、不明者ふと足し算をせしのちに悔ゆれど数の重さ限りなし

白梅に降る雨寒しベラルーシに新たな原発建つと聞きたり

ボランティアの人ら撤退したれども春はめぐり来くさくらを連れて

木の箱に釘ねむりをりうつくしき染色体のごとく並びて

さしかけてもらふものなり雨傘は表参道の夜の青葉冷ゆ

演奏会終はりて小雨 ヴァイオリン弾きゐし人のこゑを知りたし

● 選考委員による選評

詩歌を読むよろこび

三枝 昂之

二十歳の時の「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」が今なお広く愛される栗木京子さんは、題材の幅広さと柔軟な表現力、年齢に応じた自画像と知的な社会観察で常に注目されてきた。加えて今回の『水仙の章』は東日本大震災と、特に母の介護という人生の大事に直面して、栗木さんの世界をより生活感確かな豊かさに広げている。

「母の部屋は四〇六番この数字与へたりしは兄とわれなり」「母の自慢ひとつづつ減り娘婿が医師なることを今は言ふのみ」一首目は「与へたりし」に心の芯に届く痛みがあり、娘自慢が遠ざかった二首目にはなにが庶民的な尺度なのかをユーモラスに示しながら老いの現実を直視している。端的で味わい深いそれは詩歌特有の魅力でもある。

着実に広がりながら、そして深まりながら歩む栗木さんの受賞を心から喜びたい。

あたらしい展開

小池 光

栗木京子氏は現代の短歌界にあって作品、評論ともにもっとも精力的に活動している一人である。『水仙の章』はその第八歌集で、二〇〇九年から二〇一三年にかけての四百余首を収める。詩歌の生命線である比喩の工夫に力を注いできて、印象的な比喩の歌がこれまでも少なからずある作者であるが、この一冊でさらに比喩にみがきをかけ、独創的であるが突飛ではなく、穏当で説得力ある比喩の捌き方の数々を感じて読んだ。また、母の介護や、東日本大震災へ触発された歌も多く、歌材の範囲がこれまでの栗木氏の歌にない広がりを見せていることも収穫であると思われた。よい授賞歌集に出会えてよろこびとすると共に作者の更なる研鑽に期待したい。

## 新しい出発を予感させる章

永田 和宏

『水仙の章』は、栗木京子氏のこれまでの作品から大きく飛躍した印象をもたらす歌集である。人目を引くような華麗な表現から、言葉を鎮めようという意識のもとで、なお鋭利な批判精神が宿している歌が多い。

「かたまりのほぐれしのちに犬と犬走り去りたり梅林の向かう」母の部屋は四〇六番この数字与へたりしは兄とわれなり」

一首目上句の、細かなところに注目することによって犬の動きに圧倒的なりアリティを付与する描写は、早くから見られる栗木さんの特徴である。二首目には、この歌集で通奏低音のように響く母の主題が詠われる。母を番号で呼ばれる存在にしてしまったという自責の思いが鮮やかに痛い。この賞が久しぶりに歌集に与えられたこととともに、栗木さんの新たな出発を予感させるような歌集が受賞したことを喜びたい。

## 客観とともにある抒情

馬場 あき子

栗木さんの歌集には、日常性の中に心に残るニューズなどが巧みに取り上げられ、その時事性が活力を發揮するところがあつたが、この歌集では、それが内面的に沈潜した深みのある抒情となり、落ち着いた客観性とともにあらわれているのが特色だ。そこには三・一一の影響もあつたと思われ、栗木さんの歌は手法的にも新しい段階に入ったと予測される。

「木の箱に釘ねむりをりうつくしき染色体のごとく並びて」生れし日と同じ指紋をもちながら人死にゆけりからたちに棘」というような歌とともに、

「元氣な涙、かなしい涙、その間の涙涸るるな涙は温ければ」という被災地に同化しつつ歌った歌がある。栗木さんの心がしみ出したような涙の感である。

## 受賞のことば

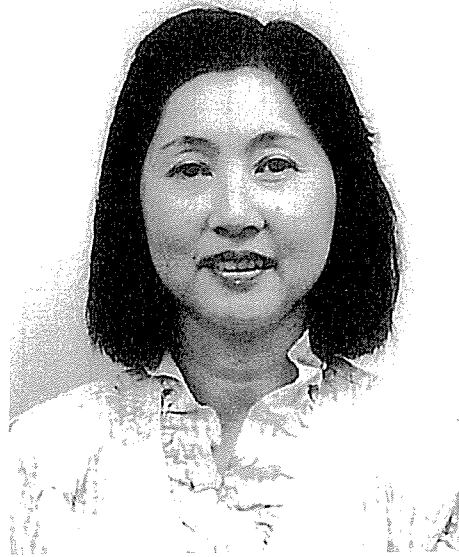
栗木 京子

四十年程前、大学生だった私は学内サークル「京大短歌会」に入会し顧問の高安国世（歌人でドイツ文学者）の研究室を訪ねた。その折に「私の母親も歌人でした。齋藤茂吉というすばらしい師と出会ったことで、ひじょうに充実した作歌活動をすることができました」という話をうかがった。国世の母堂は高安やす子。茂吉に師事した大阪在住の歌人である。国世自身も茂吉の薫陶を受け、折にふれて師の卓越した魅力を語っていた。

作歌の出発点でこうしたかたちで茂吉の大きさを知った私にとって、齋藤茂吉という表現者はつねに仰ぎ見る山脈として存在している。その輝かしい名を冠した賞をいただけることは、この上もない喜びである。

選考委員の方々に心よりお礼申し上げます。どうもありがとうございます。ございました。

これまで長らく東海や近畿地方で暮らしてきた私には茂吉を生んだ山形は憧れの地である。豊かであり、また奥の深さをあわせ持っているように感じられる。東日本大震災以降、東北は悲しみの地となってしまうが、嘆きに負けぬ力強さがここにはある。その力強さを見習って、これからも作歌に励んでいきたいと思っている。



## 第25回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

栗木 京子 (くりき きょうこ)

歌人。

1954年(昭和29年)、愛知県生まれ。59歳。

京都大学理学部卒業。

大学在学中に短歌と出会い、「京大短歌会」に所属。顧問の高安国世に師事。

その後「塔」に入会し、現在は選者。

現代歌人協会理事。日本文芸家協会会員。読売新聞歌壇選者。

### 【主な著作等】

歌 集：平成6年『綺羅』、平成15年『夏のうしろ』

平成18年『けむり水晶』、平成22年『しらまゆみ』など。

著 書：平成19年『名歌集探訪 時代を啓く一冊』

平成22年『短歌をつくろう』

平成25年『うたあわせの悦び』など。

受賞歴：平成14年短歌研究賞、

平成16年読売文学賞、若山牧水賞、

平成19年迢空賞、芸術選奨文部科学大臣賞。

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆
- 第二回 本林勝夫
- 第三回 塚本邦雄
- 第四回 前登志夫
- 第五回 斎藤 史
- 第六回 近藤芳美
- 第七回 小暮政次
- 第八回 馬場あき子
- 第九回 吉田 漱
- 第十回 佐佐木幸綱
- 第十一回 伊藤 博
- 第十二回 森岡貞香
- 第十三回 竹山 広
- 第十四回 藤岡武雄
- 第十五回 清水房雄
- 第十六回 小池 光
- 第十七回 三枝昂之
- 第十八回 花山多佳子
- 第十九回 永田和宏
- 第二十回 河野裕子
- 第二十一回 伊藤一彦
- 第二十二回 品田悦一
- 第二十三回 篠 弘
- 第二十四回 秋葉 四郎

- 『親和力』 砂子屋書房
- 『齋藤茂吉の研究—その生と表現—』 桜楓社
- 『黄金律』 花曜社
- 『鳥獸蟲魚』 小澤書店
- 『秋天瑠璃』 不識書院
- 『希求』 砂子屋書房
- 『暫紅新集』 短歌新聞社
- 『飛種』 短歌研究社
- 『白き山』 全注釈 短歌新聞社
- 『吞牛』 本阿弥書店
- 『萬葉集釋注』 集英社
- 『夏至』 砂子屋書房
- 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房
- 『書簡にみる齋藤茂吉』 短歌新聞社
- 『獨孤意尚吟』 不識書院
- 『滴滴集』 短歌研究社
- 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店
- 『木香薔薇』 砂子屋書房
- 『後の日々』 角川書店
- 『母系』 青磁社
- 『月の夜声』 本阿弥書店
- 『齋藤茂吉—あかあかと一本の道とほりたり—』 ミネルヴァ書房
- 『残すべき歌論—二十世紀の短歌論—』 角川書店
- 『茂吉幻の歌集』 『萬軍』—戦争と齋藤茂吉— 岩波書店

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇—八五七〇

山形市松波二丁目八一— 山形県企画振興部県民文化課内

TEL・〇三—六三〇—三〇六